



タンパク質科学 —生物物理学的なアプローチ—

有坂 文雄 著

B5判・208頁，価格：3,520円（税込），裳華房

本教科書を学部3年生の「生物物理学」の講義に使わせていただいたのでご紹介をしたい。前半の1～6章はタンパク質の構造形成の原理から生合成までが簡潔にまとめられており，生化学を履修した学生が復習を兼ねてタンパク質の物性に関する知見を整理・理解するために適切な内容である。本学では，ここまでの内容を中間テストの範囲とした。後半の7～12章はタンパク質の分子間相互作用の測定・解析原理の解説，代謝と再利用の理解，超分子複合体やアミロイド形成，天然変性領域の機能発現機構に至るまで，最近の知見を含めて簡潔にまとめられており，タンパク質科学の入門書として上手くまとめられている。講義担当者は教科書内のすべての図のPPTファイルを出版社から提供していただけるため，講義の準備が非常に効率的である。抗体や酵素を産業利用する際に，構造安定性や分子認識の評価方法の基礎を知っておくことは必須である。細胞内の濃厚環境下でのタンパク質のしなやかで巧みな機能発現機構を知ることで，生命現象の理解が進む。生物工学会の関係者にも是非お勧めしたい1冊である。さて，肝心の履修者の理解度であるが，答案とともに教科書の感想も記してもらった。成績上位者は「わかり易い」とおおむね好評であったが，同下位者は「難しかった」と評している。2極化したこの回答は，講義の進め方への課題と受け止めている。タンパク質を中心に話題が多岐にわたる講義となるため，ブレない話の軸を形成する工夫をして次年度以降の改善につなげたい。

（岡山大学 二見淳一郎）